

発光する背びれと戦後日本

—— 核兵器とゴジラ映画史 ——

猪 俣 賢 司

プロローグ — ゴジラの背びれ —

ゴジラの発光する背びれは、とても美しい。モノクロの銀幕に浮かび上がる、その一瞬の閃光は、銀座のネオンのようでもあり、荘厳ですらある。第1有楽橋架道橋を破壊し、日劇をバックにして白く光るゴジラの背びれは、白熱光そのもの以上に、何か大きな魅力を秘めている。『ゴジラ』（1954年、東宝）以来、戦後50年に亘り、背びれは発光し続けて来た。背びれが光らないのは、『ゴジラの逆襲』（1955年、東宝）の1作だけである。何故、発光する背びれに、これ程までに惹かれてしまうのだろうか。抑も、何故、ゴジラの背びれは光るのだろうか。ゴジラの熱線（初代ゴジラでは「白熱光」）は、日本に甚大な被害をもたらして来たが、背びれの発光は、戦後の日本に何をもたらしていたのだろうか。

ゴジラは「水爆大怪獣」だから、背びれの発光も放射能と関係がある、と言ってしまふには、実は、それ程、簡単なことではない。例えば、『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘』（1966年、東宝）では、どういう時にゴジラの背びれが光ったと思ったのか、その時の感触を覚えているだろうか。それは、ゴジラが眠りを覚ます時、稲妻に反応して光っていた。『ゴジラ×メカゴジラ』（2002年、東宝）のタイトルで、稲妻に共鳴してゴジラの背びれが光るのも、そういう系譜があるからだ。初代ゴジラのように、水爆実験によってゴジラが目覚めたのではないし、1960年代のゴジラは、世界最強の怪獣王として、他の怪獣にはない絶対的な特質として、背びれが光るのだ、と思って見ていたのである。月並みな怪獣や恐竜は光らない、憧れの怪獣、力強い特別なエネルギー（原

子力と放射能)を持つ存在だからこそ、光っていたのだ。背びれの発光と放射能との関連は、『キングコング対ゴジラ』(1962年、東宝)で既に示唆的に描かれている。当時の私の年齢では、これを「東宝チャンピオンまつり」になってからしか見られなかったが、それでも、輝く夢のエネルギーである「原子力」と発光する背びれは、雨と一緒に降って来ると思っていた危険な「放射能」とは全く別物として、その魅力を持っていた。背びれの発光と「安全」ではない放射能との関連性が明白に描かれたのは、復活版『ゴジラ』(1984年、東宝)になってからのことである。ゴジラは、放射性物質を吸収してくれる、「G細胞」という驚異的な生命力を持った、心強い存在であったのだ。

『ゴジラ』は、「第五福竜丸」と正しく同時代のものであり、大気圏内核実験の放射能汚染に曝され始めた「1954年」という同じ年を共有している。そして、「第五福竜丸」は、映画製作上の大きな動機の一つでもあった。完成された映画は、貨物船「栄光丸」の航跡とその沈没シーンで始まるのだが、「G作品検討用台本」の通りに製作されていたとするならば、「第五福龍丸、焼津入港」のシーンから始まっていたはずである⁽¹⁾。『第五福竜丸』(1959年、近代映画協会、新世紀映画)と較べてみると、この二つの映画は、製作上、実際にどういう繋がりがあったのかということは必ずしも定かではないが、両者共、極めてよく似た映像が幾つもあることに気が付く。それらの映像が表しているものは、「海」、「船」、「漁業」、「閃光」、「被曝」、「死」、「鎮魂」、つまり、太平洋で営まれる日本人の日々の生業と、たとえどんなに巨大で異常な事実に見舞われようとも、最終的には、個人の死と葬送を以て表現するしかない、ということを感じさせるものである。

初代ゴジラの東京初上陸は、1954年当時、まだ存在した第二台場附近から姿を現わし、埋め立て中であった現在の品川埠頭を通過し、京浜運河、高浜運河を越えて、既に埋め立て造成されていた天王洲と埋立九号地(現在の港区港南三～四丁目)附近を通って、ゴジラは、八ツ山橋や品川駅へと向かった。『ゴジラ』が公開された1954年11月には、焼津港から廻航、繋留されていた「第五福竜丸」が、当時、港南に移転を始めていた東京水産大学の岸壁にあったはずである⁽²⁾。映画の中では、「第五福竜丸」は、描かれてもいないし、言及されても

いないが、初代ゴジラは、「第五福竜丸」を踏み潰さずとも、確実に眼にしていたはずなのである。

また、映画の中で、「大戸島」へと調査に向かい、東京湾でゴジラを倒した時にも使われた船が、巡視船「しきね」(PM21)だが、焼津港から東京へ「第五福竜丸」を実際に廻航したのも、巡視船「しきね」であった。これらの因縁は、偶然のことではあっても、『ゴジラ』と「第五福竜丸」は、映画の製作上、関連があったという以上に、「1954年」という時代を必然的に共有していたものだったのである。ゴジラは、もう一つの「第五福竜丸」であった。

ゴジラ映画史は、帝国の残映として、戦前の日本を引き摺って来た文化史であると同時に、核兵器の戦後史を表現し続けていたとも言える。核エネルギーと何らかの関係を含みつつ、50年にも互って、ゴジラという一つの存在を描き続けて来た映画も、繰り返される原爆の「きのご雲」の映像を除いては、稀有であろう。一方では、日本を襲い、熱線を撒き散らし、原水爆を想起させ、一方では、被爆しても猶、その生命力を維持し、一方では、放射線を吸収し、原子炉を瞬く間に廃炉にしてしまう、そんな驚くべきエネルギーの集合体に惹き付けられたのが、日本のゴジラ映画史であった。そして、悪夢の中に美しい夢を見ているような、背びれの発光は、そんな一瞬の感覚を与えてくれていたのではないだろうか。それは、ゴジラの背びれが熔けてゆくのを見た時には、逆に、どう感じたであろうか、悲しさを感じはしなかったであろうか(『ゴジラvsデストロイア』, 1995年, 東宝), ということでもある。

ゴジラの背びれは、光らなくても、魅力的である。背びれの輪郭こそが、ゴジラそのものだったと言ってもよい。それは、放射能による糜爛だったのかも知れない。が、発光する背びれは、復興し繁榮する戦後日本の中で、原子核エネルギーの美しい未来の夢として映った。その忌まわしきは、ゴジラ一人が犠牲になって背負い、消去してくれていたのだ。別の言い方をするならば、忘れられていた、或いは、忘れていたい事実を「銀幕」に投影していたのが、発光する背びれだったのである。でも、本当に、それだけなのであるだろうか。

I. 第五福竜丸, 1954年 — 映画『第五福竜丸』と『ゴジラ』—

マグロ漁船

ビキニ島東方沖で被爆した「第五福竜丸」は、1952年、サンフランシスコ講和条約の発効によって、敗戦後に禁止されていた日本の遠洋漁業が解禁されたという背景がある。占領下の日本が独立し、日本人が「太平洋」や「南洋」へと再び出てゆこうとした矢先のことであった。嘗ての日本の委任統治領南洋群島は、米国の信託統治領太平洋諸島になっており、そこで被爆したのだ。この「第五福竜丸」の「ビキニ被災事件」を、5年後に一本の映画として描いたのが、新藤兼人監督の『第五福竜丸』（1959年、近代映画協会、新世紀映画）である。

この映画は、確かに「ビキニ被災事件」を描いたものだが、「第五福竜丸」を描いたものであるということは、ここで改めて触れておきたい。それは、映画の題名そのものにも表れていることである。1954年1月22日、焼津港を出港するマグロ延縄漁船「第五福竜丸」（船名の正式表記は「第五福龍丸」）の生き生きとしたシーンから始まるこの映画は、水爆被災と久保山愛吉さんへの追悼という結果を突き付けられることになるとは、とても思えない前半部を持った映画であるからだ。ミッドウェー海域、そして、南下してのマーシャル諸島ビキニ環礁近海での操業シーンは、遠洋漁業を宣伝する産業映画のようでもある。1954年3月1日の被爆シーンまでの「時間」は、長く、そして、貴重なのである。被爆した船であると同時に、太平洋へ再び進出し、漁業を営んでいた船であったことを記録することによって、現在の私達を振り返らせることができなかつたならば、映画『第五福竜丸』の意味も半減していたであろう。捕獲されたマグロから噴き出す船上の多量の鮮血も、モノクロの映像ではあっても、日本人の生業の一端が何処にあったのかということを見せてくれる。ティレニア海の火山島で暮らす人々のマグロ漁をドキュメンタリー風に描いた、ロッセリーニの『ストロンボリ』（1950年）のようなシーンでもある。『ゴジラ』で大戸島の古老（老漁夫）が語る、呉爾羅は「海の魚を食い尽くすと……」という言い伝

えも、ゴジラ映画史上、ゴジラが食物として生物を捕獲したことは実は一度もないのだが、大戸島の島民の暮らしや漁業とも係わっており、『第五福竜丸』が、同じく「太平洋」を描く『ゴジラ』を補完していたのである。『ゴジラ』には、沈没したので「描かれなかった」漁船もあった。

「第五福竜丸」は、1947年、三浦三崎港のカツオ漁船「第七事代丸」として進水したが、1951年、マグロ延縄漁船に改装され、1953年に、急成長する遠洋漁業のマグロ専用漁船として、焼津港に買い受けられたものであった。遠洋漁業は、木造船から鋼鉄製へ、200t以上と大型化してゆく時代であったが⁽³⁾、「第五福竜丸」は、木造140t、全長25.20m、既に老朽化していた。しかし、1954年3月14日、焼津港に帰港するまで、「第五福竜丸」は、紛れもなく「マグロ漁船」であった。被爆後も猶、「死の灰」が降る中で乗組員たちは揚縄の作業を続けた。映画『第五福竜丸』撮影当時は、東京水産大学の練習船「はやぶさ丸」として改造されていたので、映画の中で実際に使用された船は、同型の漁船を借り受けたものだが、焼津港での現地ロケに新藤監督が拘らなければ、まるで記録映画を見ているような、この様な漁業映画は撮れなかったであろう。

そして、「第五福竜丸」を描いた映画であると否応なく感じさせられる、もう一つのシーンが、東京に向けて、焼津港から廻航されるシーンである。曳航したのは、事実としては、第三管区下田海上保安部の巡視船「しきね」であった⁽⁴⁾。『第五福竜丸』には残念ながら登場しないが、『ゴジラ』に登場したのが実物の「しきね」であり、1954年9月、国鉄青函連絡船「洞爺丸」の事故を始め、小型漁船の沖合での事故など、1950年代から60年代にかけて、多発する海難事故に活躍した巡視船の一隻であった⁽⁵⁾。映画では、「第五福竜丸」がゆっくりと曳航され、焼津港を去ってゆく。そのシーンは、とても長く感じられ、この映画の最も感動的なシーンである。被爆した「第五福竜丸」が、病床の「久保山愛吉」と重ね合わされるシーンでもあり、航海の回想シーンを除いて、映画の中での「第五福竜丸」の最後の姿である。現在、実物の「第五福竜丸」は、東京都立第五福竜丸展示館（江東区夢の島）で見ることができる。

映画『第五福竜丸』が、水爆実験による被災事件を描いたものであると同時に、「第五福竜丸」という（被爆船ではなく）漁船を描いたものだということが

重要なのは、漁船という「物質文化」が人間の生き方を語ってくれるものであり、また、被爆以前の「日常」が何であったのかということを読み起こさせてくれるからである。『ゴジラ』では、冒頭のほんの束の間の平和から、瞬く間に巨大な海が光り、貨物船「栄光丸」が沈没してしまう。貨物船や漁船の沈没や行方不明という、既に異常な事態から、映画は始まるのである。「G作品検討用台本」のまま、「第五福龍丸、焼津入港」のシーンで始まっていたとしても、それは、既に「被災船」である。ゴジラが存在するのが「日常」であるというのが、50年続いたゴジラ映画の世界であった。

徴用船

焼津港（焼津漁港）は、江戸時代よりカツオ漁が盛んであったが、1939年以来、漁港の整備が進められ、戦前から全国一のカツオ・マグロ遠洋漁業の基地として、ミッドウェー海域や赤道附近まで進出していた⁽⁶⁾。そして、戦時下には、多くの漁船が臨時徴用されている。戦後、1951年、漁港指定を受けて整備され、1952年、遠洋漁業の解禁により、再び太平洋へと進出するようになって起こった事件が「第五福竜丸事件」であった。

第五福竜丸・漁労長（船頭）の見崎吉男（映画では見島民夫、稲葉義男）が乗っていたカツオ・マグロ兼用漁船「福積丸」（131t）は、1942年に、海軍特設監視艇として徴用されている。「福積丸」は、1944年、船団を組んでいた僚船と共に、小笠原諸島の母島で米軍機に撃沈させられた。見崎吉男は、戦後、引揚船の甲板員もしている。また、第五福竜丸・操舵手の見崎進の乗っていたカツオ漁船「新勢丸」（148t）も、同じく海軍特設監視艇として徴用され、1945年、小笠原諸島硫黄島海域で、米軍機の機銃掃射を受けた⁽⁷⁾。戦後、見崎進と一緒に「新勢丸」に乗っていたのが、第五福竜丸・冷凍士の大石又七である。第五福竜丸・甲板員の吉田勝雄は、土浦海軍航空隊予科練に入っていたという。この様に、焼津港では、「福積丸」、「新勢丸」、「第二宝松丸」、「第六勇氣丸」など、85隻の漁船が徴用船として戦時動員され、第五福竜丸の乗組員たちは、一番最初に死去した無線長（局長）の久保山愛吉も含め、米国との戦争を経験し

ていた。

映画『アナタハン』（1953年、東和）は、冒頭のシーンで、航行する日本の船団が、米軍機 P-38 ライトニングに銃撃されるシーンで始まるが、1944年、海軍に臨時徴用され、トラック島に向けて南下していたカツオ漁船群「海鳳丸」、「兵助丸」、「曙丸」が撃沈され、30名の男たちがアナタハン島に漂着したことが背景になっている。戦後の「漁士」たちが戦時下に動員されていたことが、『第五福竜丸』にも描かれているように、被爆後、無線連絡も控え（「無電は打たないよ、キャッチされると困るからな。」）、飛行機に注意していた行動（「飛行機を警戒しろ。」）に繋がっている。最高軍事機密を見てしまい、米国に拿捕、撃沈されるのを怖れたからであり、実際に、ビキニ核実験場の危険区域を米軍哨戒機が飛んでいた。1950年代、漁船の消息不明も相次いでおり、『ゴジラ』や『第五福竜丸』の背景ともなっているのである。

徴用船として多くが撃沈され、敗戦後、漁船として乗る船もなかった時代を経て、やっと遠洋漁業が再開され、「第五福竜丸」に乗組員23名は乗船する。「第五福竜丸」は、戦後に建造されたものだが、その乗組員たちは、戦時下を乗り越えて来た。占領下から独立した日本の焼津港から出港する生き生きとしたシーンで『第五福竜丸』が始まるのは、その様な、太平洋や南洋を繞る「船」と「港」の戦後史を映し出していたのである。

ウラン237

水爆実験やゴジラの被害によって、結局は、死者と鎮魂という人間の生老病死に係わる「日常」の苦しみに帰結せざるを得ないものだというのを、『第五福竜丸』と『ゴジラ』の最終シーンは描いている。この二つの映画は、エンディングが同じにしかならなかったのである。それは、人間の生み出した巨大なエネルギーを制御することができないままであったからだ。が、ゴジラ映画史は、後で述べるように、その後、少し別の道を歩むことになる。

『第五福竜丸』では、3月1日に被災、3月14日に帰港、3月16日の新聞第一報（読売新聞）と続くシーンからが、「ビキニ水爆被災事件」の映画となっており、

乗組員23名の病床生活を中心にして描き、9月23日、久保山愛吉さん(宇野重吉)の死去、東京から焼津への帰郷、葬儀まで、ドキュメンタリー風映画に徹して、実際の時間的順序に、淡々と映画の時間軸も合わせられている。「きのこ雲」で始まるのではなく、「第五福竜丸」の「日常」から始まり、刻一刻と、死へと向かっていく映画であるだけに、「第五福竜丸」を扱ったほぼ唯一の作品として貴重である。その様な中で、原子核物理学に絡む専門用語が出てくるシーンがある。「ストロンチウム90」は、『ゴジラ』の台詞でも言及され、1950年代、新聞にも頻出する名称だが⁽⁸⁾、「日本分析化学討論会」(1954年5月30日、京都大学)で木下博士(千田是也)が発表する「ウラン237」は、2011年3月11日以降の氾濫する放射性物質の名称にも見当たらないものであろう。

映画の中で、「第五福竜丸」に残された「ビキニの灰」を分析したところ、「フィッション・プロダクト」(核分裂生成物)として「ウラン237」が検出されたので、感慨深かったと言われるのである。それは、理研の仁科博士が、戦前に発見していたものだったからである。そして、「ウラン237」は、ローゼンバーグ夫妻を死刑にしてまで米国が守りたかった水爆の秘密(1953年、原子力スパイ事件)を解く手掛かりでもあった。原子爆弾は、超高温・超高压の中での核分裂連鎖反応によって爆発を起こさせるものであり、長崎に投下されたプルトニウム型原爆には、「コンピューターの父」とも言われるノイマンの爆縮理論(implosion theory)が応用されている⁽⁹⁾。水素爆弾は、原子爆弾の核分裂による起爆のみならず、核融合を伴う核兵器である。フィッション、フュージョン、フィッションの三段階(3F, fission-fusion-fission)の反応を経て爆発したものが、それが、米国の「キャッスル作戦」で使用された水爆「ブラボー」の構造だということが、「ウラン237」の検出によって、その後、推定されたのである。プルトニウム、或いは、ウラン235(濃縮ウラン)の核分裂後、重水素(デューテリウム)が核融合し、その中性子によってウラン238(天然ウラン)が更に核分裂して「ウラン237」が生成されたのではないかということである⁽¹⁰⁾。重水素や三重水素(トリチウム)ではなく、コバルトカリチウムではないかという推測もあった⁽¹¹⁾。映画の中では、「ウランで囲んだウラン爆弾」と言われているものである。

理化学研究所の仁科芳雄は、1937年、小型サイクロトロン^{シクロ}の完成後、速い中性子をウランに照射し、その核分裂生成物として「ウラン237」を発見した。原子番号92番のウランから、質量数237の原子番号93番の元素が出来ることを予測したのである⁽¹²⁾。原子番号93番の放射性元素がネプツニウムであることは、仁科はまだ確認できなかったという。当時、その様な重核種の研究に共同で取り組んでいたのが、「ビキニの灰」を化学分析した東京大学理学部の木村健二郎博士であった⁽¹³⁾。映画に登場する「木下博士」である。

ウラニウム爆弾

1945年8月9日から10日に互^{しげのり}って、東郷茂徳外務大臣は、在スイス公使館の加瀬俊一公使に対して、大至急で電文を送っている。広島に投下された「新型爆弾」に対する抗議の件であるが、加瀬公使は、「[アトム]爆弾」(8月8日発)、「原子爆弾」(8月9日発)に関する「瑞西情報」をベルンから送信していた⁽¹⁴⁾。そして、投下された爆弾が、爆発の規模から、「原子爆弾」であったと国内で推定していたのが、理研の仁科研究室であった。

仁科は、小型サイクロトロンが完成した時から、大型サイクロトロンを構想したが、1944年、建設が難航する大型サイクロトロンで、重水素の実験が最後であったという⁽¹⁵⁾。この大型サイクロトロンは、科学技術の戦時動員の中で、「二号研究」と呼ばれる、陸軍航空本部に委託されたウラン濃縮研究の一環であった。「ウラン235」を10%含む濃縮ウラン10kgを、減速した中性子で原子核分裂させて「ウラニウム爆弾」(原子爆弾)を製造しようとしたものである⁽¹⁶⁾。米国が投下した爆弾が「原子爆弾」であると推定できた背景には、日本の原子核物理学の発展が期待されていた。米国では、マンハッタン計画の中で、ノイマン(John von Neumann)やシラード(Leo Szilard)らも加わり、核分裂連鎖反応の研究を進めて、原爆製造にまで漕ぎ着けたのであった。

『フランケンシュタイン対地底怪獣^{バラゴゾン}』(1965年、東宝)には、キール軍港から、ドイツ海軍のUボートを経由し、日本の伊号潜水艦で運ばれるフランケンシュタインの心臓が描かれている。戦前、砲弾に当たっても死なない兵士を研究す

るためのものであった。それは、廣島陸軍衛戍病院^{えいじゆ}に運び込まれた直後、B-29が上空に現われ、原爆が投下される。戦後に蘇ったその生命体が、東宝特撮映画に描かれた日本のフランケンシュタインであった。フランケンシュタインの心臓とは、一体、何であったのだろうか。1945年、ドイツのUボート234号が、日本への機密物資を輸送する特命を帯びてキール軍港を出港したが、それは、酸化ウラニウム560kgだったとも言われる⁽¹⁷⁾。原爆製造に必要なウランの天然資源を持たない日本にとって、戦後、人形峠での採鉱(1955年、鉱床露頭発見)の試みもあったが⁽¹⁸⁾、ドイツから輸送されたフランケンシュタインの心臓とは、実は、ウランの隠喩だったのである。

帝国日本は、原爆製造には至らず、被爆国として敗戦を迎えたが、戦後、米国からウランを供与されて、「平和利用」と称する原子核エネルギーを謳歌する道を選択した。それが、現在の発電用原子炉である。『ゴジラ』に登場する山根恭平博士(志村喬)が古生物学者であったことは、戦時下に於ける地質学の重要性、つまり、外地(植民地)での地下資源調査や、南方での石油開発など、戦時動員体制と植民地政策の下で軍事目的で動員された戦時科学史と関係がある⁽¹⁹⁾。成瀬巳喜男の『浮雲』(1955年、東宝、林芙美子原作)で、富岡兼吾が仏印に派遣された農林省の官吏(軍属)であったこととも同軸であろう。戦時下の科学技術史が、装いを替えて、戦後のゴジラや原子力になったのである。

II. 放射能とゴジラ — 被曝しない戦後映画 —

水爆か、生命か

ゴジラは、「水爆」か「生命」かという、根源的な対立を最初から内包したものであった。尾形秀人(宝田明)は、日本に覆い被さる「水爆そのもの」と言い、山根恭平博士(志村喬)は、水爆の放射能を受けても生きている「生命」だと言い、この二人は対立する。この二人の間に立つ山根恵美子(河内桃子)は、大戸島に向かう巡視船「しきね」の船上からその航跡を見ても、そこに帝

国の歴史が刻まれていることを知ることすら覚束なく、無知でただ不気味そうな眼差しで見詰めるしかない、余りにも無邪気な役を演じている。この深刻な対立の中で、ゴジラは、芹沢大助博士（平田昭彦）が密かに開発していた「オキシジェン・デストロイヤー」（水中酸素破壊剤）によって、骨まで消滅させられた存在であった。恵美子の無邪気さが、「水素爆弾」よりも恐ろしい酸素兵器を使用させることになり、芹沢の命をも奪ったのである。

その後、1960年代のゴジラが、子供たちにとっての「ミニラ大明神」（『ゴジラ・ミニラ・ガバラ オール怪獣大進撃』、1969年、東宝）の父親（『怪獣島の決戦 ゴジラの息子』、1967年、東宝）であり、地球を守ってくれる正義の味方「怪獣王」であったのは、1954年の『ゴジラ』が持っていた対立を休止し、「原子力」と「生命」の二大エネルギーが共存できるという夢に溢れていたからだ。来たる「21世紀」は、完全な「原子力の時代」（『モスラ』、1961年、東宝）になり、潜水艦も飛行機も自動車も、原子力で動くものだという空想を掻き立てていた。「原水爆」と「原子力」は、全く別物であったし、超宇宙怪獣キングギドラにも勝り、核エネルギーをも制御し得る、頼りになる怪獣が日本にはいてくれたのである。復活版『ゴジラ』（1984年）以降、平成ゴジラ・シリーズとミレニアム・シリーズでは、原子核エネルギーと生命細胞がモチーフとして並置されるようになったが、だからと言って、核の「軍事利用」と「平和利用」の境目を疑ってみる現実の視点まで観客に提示していた訳ではない。

ゴジラは、水爆であり、生命であり、正と負のエネルギーであり、犠牲（被爆や戦死）でもあるという、あれもこれも意味を担おうとした、欲張りな怪獣である。それが、戦争に敗れて、復興し、高度経済成長を成し遂げ、日本が発展する原動力でもあったかのようであり、確かに、戦後の難題をもゴジラ一人に背負わせて来たのだ。太平洋戦争で死んでいった人々の「残留思念の集合体」（『ゴジラ・モスラ・キングギドラ 大怪獣総攻撃』、2001年、東宝）という理解も、ゴジラ映画史を戦後文化史として振り返ってみた時に、それが、最も重要な視点だと考えられるし、ゴジラが日本と南洋を「往復」する存在であることを説明できる大きな意味として浮かび上がって来るものである。外地からの引き揚げや復員、原爆、戦争後遺症、断ち切られた南洋など、日本人が敗戦後を

どう生きてゆくのかという、1950年代の映画が描く主題とも高い整合性を持っている。しかし、戦後になって、1946年の「クロスロード作戦」を始め、第五福竜丸被爆事件を引き起こした1954年の「キャッスル作戦」など、米国が太平洋で実施を重ねた核実験の時代（予防戦争）を生きて来たことや、「原子力の時代」を日本も歩んでいることを視野に入れない限り、ゴジラが「水爆」と「生命」の矛盾を背負って来た意味がないであろう。このことは、銀幕の上のことだからと言うよりも、余りにも明白な現実であるが故に、逆に、時折、気が向いた時に話題にすればよかった視点であった。

ゴジラが初めて原子力発電所を襲ったのは、復活版『ゴジラ』（1984年）でのことである。静岡の「浜井原発」（浜岡原発）を襲ったゴジラは、原子炉から放出される放射線を、悉く吸収してしまう。近くにいた人間も、不思議なことに、放射能の心配を殆どしていない。このゴジラは、青ヶ島の北西50kmの太平洋で、ソ連原潜も撃沈させており、放射性物質を摂取することが明らかになった作品である。原子力潜水艦が襲われること自体は、復活版ゴジラが初めてではない。ゴジラ映画第3作『キングコング対ゴジラ』（1962年、東宝）の冒頭では、北極海を調査する国連の原潜シーホーク号が、青白く発光する冰山を発見し、ゴジラに撃沈されている。この作品では、ゴジラが放射性物質を目当てに原潜を襲ったようには見えないが、「チェレンコフ光」と台詞でも言われた、その発光する冰山から、そこに眠っていたゴジラが目覚めて出現しており、背びれの発光と放射能との関連性が示された作品であった。しかし、炉心から噴き出す水蒸気を吸い込み、背びれが青白く光る復活版『ゴジラ』の映像は、露骨なまでに、ゴジラと放射線との極めて直接的な意味をあからさまに表していた。それにも拘わらず、放射能では誰も死なないし、病気にもならない。まるで、放射能と人間の間に立つ盾であるかのように、ゴジラ一人が被曝している。また、復活版『ゴジラ』は、冷戦終末期の再燃する米ソ対立構造を色濃く描いている作品でもあり、ソ連の人工衛星に搭載された核ミサイルの発射ボタンが押されてしまう。大気圏外で迎撃できたが、東京上空に放射能が降り注ぎ、ゴジラは元気になる。

ゴジラ（或いは放射能）による人間の「死」を描いたと言えるのは、ゴジラ

映画史の中で、初代『ゴジラ』（1954年）の特設災害対策本部（第八臨時收容所）での、母と幼い娘の死別シーンしかないと言っても良いだろう。子供の被曝を調べるガイガー・カウンターも、そこでは沈痛な表情で描かれている。ゴジラ映画は、怪獣（しかも放射能を帯びている）が襲って多くの人が犠牲になっているはずだが、元々、人の死を描く類の映画ではないので、一種の「戦争映画」ではあっても「戦死者」は殆ど描かれなかったし、放射能の危険性も、結局の所、その後のゴジラ映画史には描かれなかったのである。ゴジラが通過した後の残留放射能も、殆ど問題にならない程、安全であった。ゴジラは、放射能を無害化し、「被曝者」を出さない「放射能怪獣」だったのである。

水中酸素破壊剤

『ゴジラ』（1954年）では、架空の兵器「水中酸素破壊剤」（オキシジェン・デストロイヤー）によって、ゴジラと、これを命と引き換えに使用した芹沢博士が、東京湾の海底で共に死んでしまう。この兵器は、酸素の研究から発見されたある化合物であり、水中操作でしか完全には作用しないとも言われているので、水（ H_2O ）、酸素（O）、水素（H）が何らかの形で反応する兵器なのだが、水爆を上回る威力や脅威を持っているかのように描かれる。水爆実験によっても死ななかった「水爆怪獣」ゴジラを倒し得たということでは、「水中酸素破壊剤」を凌駕できる兵器は、原子爆弾でも水素爆弾でもなく、その後のゴジラ映画にも最後まで登場しなかった。この様な兵器の発明と行使の代償として、ゴジラと芹沢博士の二人の「死」があるようにも見えるのであり、原水爆を超えてしまった（或いは、贖ってしまった）のである。その後のゴジラと数々の対ゴジラ兵器が、原水爆を無力化し、過去のものとしていった発端がここにある。しかし、ゴジラを抹殺するために（平和のために、或いは、抑止のために）、この対抗兵器を使用したかった人達（尾形と恵美子）がいて、戦後を担っていったことも忘れる訳にはいかないだろう。

山根博士の台詞「あのゴジラが、最後の一匹だとは思えない。」とは、今後も水爆実験が繰り返されるであろうことを危惧したものであり、久保山愛吉氏の

遺言として柔らかい表現に変えられた「原水爆の被害者は、私を最後にしてほしい。」という願いと同じものであったが、「水中酸素破壊剤」は銀幕の中で消え、原水爆は残ったのである。だから、水爆でも死なない生命を研究しようとした古生物学者山根恭平（志村喬）がいるのであり、その延長線上に、砲弾に当たっても死なない兵士を研究しようとした『フランケンシュタイン対地底怪獣^{バラゴン}』（1965年）の廣島陸軍衛戍病院の軍医（志村喬）もいるのだ。銀幕のゴジラを見ながら、ゴジラにふと感情移入する瞬間を感じ、放射能でも死なない命までをも夢見て来たのではないだろうか。

被爆するインファント島、繁栄する銀座のネオン

『ゴジラ』（1954年）の中で、原水爆について言及される台詞は、実は、山根博士の国会答弁での「水爆実験」、「ストロンチウム90」と、京浜線車内での乗客の会話にある「原子マグロ」、「長崎の原爆」くらいである。被爆して敗戦し、今また第五福竜丸被爆事件に遭遇し、これ以上言わなくても、『ゴジラ』が何であるのか、当時は分かったのであろう。太平洋のシーンで始まり、太平洋のシーンで終わる『ゴジラ』が、映画『第五福竜丸』にも見られる「海」と「船」、「閃光」と「被爆」、「死」と「鎮魂」という展開を見せているのも、洋上の大気圏内核実験の時代を生きていた映画だからであろうし、「平和への祈り」（祈る乙女たちの歌声）も、『第五福竜丸』の「ああ、許すまじ原爆を、三度、許すまじ原爆を」の歌声に連なっている。

しかし、その一方で、銀座や新宿のネオン、東京湾遊覧船など、復興する東京が描かれていることも『ゴジラ』の特徴である。背びれの発光は、夜の銀座に美しく浮かび上がり、銀座のネオンと競い合っている。しかも、ゴジラ迎撃のために、京浜地区一帯に鉄塔を建て、送電線を張り巡らして、5万ボルトの電気を流しているのだ。「メーサー殺獣光線車」や「アブソリュート・ゼロ」などの対G兵器を含め、その後のゴジラ対策にも、厩大な電源を必要としていたのである。高度経済成長を迎え、電力需要が逼迫する1950年代の中で、「電力」と「自衛隊」がゴジラに対抗し、復興する日本は、再軍備と原子力の平和利用への

道を歩むことになった。「原水爆」から遊離し、「エネルギー問題」へとゴジラ映画史が傾斜していったのは、必然でもあったし、初代『ゴジラ』が既にその端緒に就いていたということである。ゴジラは、放射能から日本人を防御し、電力需要を高めていたのである。

『モスラ』（1961年）のインファント島は、水爆実験によって島の4分の3が吹き飛んだ。無人島だと思われていたが、爆発から生き残り、「赤いジュース」を飲んで、放射線障害を免れていた原住民がいたのである。そこには、爆死したり、放射能で死んだはずの「描かれなかった」インファント島原住民もいたということである。また、住民の中には、既に発症している人もいるかも知れない。ビキニ水爆実験により、ビキニ、エニウエトク、ロンゲラップ、ロンゲリック、ウトリックなど、現実の島々で被爆した住民とも重なるものであるが、水爆による死人や病人のことは、映画では描かれてもいないし、気も付かないであろう。絶対致死量と言われる放射能の中で、「第二玄洋丸」の乗組員たちは、魔法のようなその「赤いジュース」のお蔭で何事もなかったかのように生還しているからである。そうはいかない現実が、『第五福竜丸』には描かれていた。インファント島は、台詞にもあるように、「ロマン」の中で「そっとしておきたい」異郷の島であり、日本国内では小美人（ザ・ピーナッツ）の歌と踊りが南洋憧憬を掻き立てるばかりで、被爆したインファント島と、被爆を捨象して繁栄する1960年代の日本列島は、隔てられ、乖離し、両極性にあったのである。「日本」と「南洋」は、戦後、ますます遠くなっていった。1954年、856隻余りの日本の漁船が被爆し、焼津、清水、三崎、東京、塩釜の5港に水揚げされて、築地市場でも廃棄処分され埋められた「原子マグロ」（放射能マグロ、原爆マグロ、水爆マグロ）の記憶⁽²⁰⁾も、長くは続かなかったのである。

大気圏内核実験に曝されていた初代ゴジラの時代は、1960年代のモスラの時代になり、1962年、キューバ危機の後、1963年、米英ソの間でPTBT（部分的核実験停止条約）の合意を見たが、この年、大気圏内核実験による日本の放射性降下物の線量は最大であった⁽²¹⁾。にも拘わらず、「ストロンチウム90」は、ゴジラが初めて日本を襲った「大戸島」で検出されて以降、ゴジラ映画の中では言及されずに済んで来た。水爆シーンで始まり、放射線によって液体化する

『美女と液体人間』(1958年、東宝)や、インファント島の巨大なコケ(赤いジュースが搾れる)を連想させ、人間が異常なキノコになる『マタンゴ』(1963年、東宝)など、東宝特撮映画は、人間を変身させる(正常な細胞が変異する)ことによって、放射能の不気味さも描いていたが、液体人間もマタンゴも、現実社会への喚起力を持っていた訳ではなかった。1955年、広島で開かれた第1回原水爆禁止世界大会で結実した国民運動も、1960年代には、政治的な分裂もあり、原水爆禁止運動は、繁栄する日本の中で衰退していった⁽²²⁾。反核運動(核廃絶運動)や再軍備反対運動とは別の次元だとしても、歴代のゴジラが熱線を放射すればする程、原水爆や第五福竜丸には無頓着でいられた平和と繁栄を感じられる「日常」を享受していたということである。

III. 核兵器の戦後史 — 描き続けた50年 —

原子炉

ゴジラは、銀幕の上で、原水爆や放射能を無力化し、抑も怪獣の出現など、余りにも有り得ない状況を描くことによって、上述したように、現実の感覚を鈍化させていた媒体の一つとなっていたのやも知れない。しかし、ゴジラ映画が日本の社会を動かしていた訳ではなく、日本の社会の反映が銀幕の世界であることは言うまでもないことだろう。ゴジラが核を脱色化したのではなく、現実の世界が核を脱色化していたのである⁽²³⁾。広島、長崎の原爆も、第五福竜丸の遭遇した水爆も、核の平和利用の夢も危うさも、時間と共に風化してゆく過去や、忘れていられる眼の前の現実が、歴代ゴジラの発光する背びれに投影され、記憶されて来たのである。1961年の『モスラ』に見られる、日本とインファント島の対比は、極めて素晴らしい「映画」である。インファント島が、ゴジラ映画史の中で何度も繰り返し描かれなければ、被爆した「南洋」の島があることすら、子供の頃からの記憶として定着しなかったであろうし、「放射能雨」を傘で凌ぐだけでは、日本の子供たちは不安で仕方なかったであろう。ゴジラ

の黒い巨体は、「暗い」戦後を表すかのようでもあるが、発光する背びれは、電力が豊かに供給され、「明るい」戦後を照らし出している。ゴジラは、そのためにも核物質を必要とし、原子力潜水艦や原子力発電所を求めているのだ。静岡県浜浜原発（架空の原発、浜岡原子力発電所、『ゴジラ』、1984年）と、東海発電所（1966年の設定、『ゴジラ×メガギラス G消滅作戦』、2000年）は壊され、高浜発電所（『ゴジラvsビオランテ』、1989年）、伊方発電所（『ゴジラvsデストロイア』、1995年）、東海第二発電所（『ゴジラ 2000 ミレニアム』、1999年）は、襲われそうになった。

1954年、ソ連が初めて、核の平和利用として、原子力発電所（オブニンスク発電用黒鉛原子炉）を操業開始した⁽²⁴⁾。1951年に建設を開始していたものだが、ソ連に対抗して、1953年12月、アイゼンハワー米大統領が国連演説「平和のための原子力」(Atoms for Peace)を行ない、原子力発電が推進されることになる。米国は、原潜用動力炉を改良した軽水炉の開発を進めていたが、日本が最初に導入した原子炉は、英国のコールダーホール型であり、1966年に商業用発電炉として東海村（原電）で営業を開始した⁽²⁵⁾。この東海発電所を1966年にゴジラが襲ったと、2000年の『ゴジラ×メガギラス G消滅作戦』では描かれるのだが、1966年の『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘』で、当時、感じられたことは既に述べた通りである。映画の中では、「赤イ竹」という秘密組織が開発した核兵器の暴発によって消滅する「レッチ島」も描かれていたのだが、それが日本の暗喩だと思って見ていた訳ではない。モスラが助けてくれたし、それに、ゴジラも無事だった。1954年、原子力予算案が計上され、原子力産業に参入してゆく三菱商事が復活し、翌1955年、最初の日米原子力協定（濃縮ウランの供与）が調印され、原子力基本法が成立する。1957年には、日本原子力発電株式会社（原電）が設立されている。原子力は、第五福竜丸ビキニ被爆事件と並行して着々と進められて来たものであり、核エネルギーの軍事利用と非軍事的利用の両義性が、発光する背びれにも映し出されているのである。

1930年代、人工放射能やウランの核分裂が発見され、中性子による連鎖反応も予想されていた。ドイツやハンガリーからユダヤ系物理学者たちも移住し、1942年、ロスアラモスで研究が進められたのが、爆縮理論（ノイマンが計算、

1943年)による核分裂連鎖反応(シラードが既に予測)であった。ニールス・ボーアやエンリコ・フェルミらの原子核物理学が戦時動員され、マンハッタン計画で原子爆弾が製造されたのである。戦後も、米ソ冷戦の中で、1949年、ソ連が原爆実験に成功し、翌1950年に、トルーマン米大統領が水爆製造を指令した。そして、1952年11月、マーシャル諸島で行なわれた「アイビー作戦」で、米国が史上初の水爆実験に成功したのだが、翌1953年8月には、ソ連が水爆所有を発表した。この様な、米ソが対立する核エネルギーの軍事利用とほぼ並行して進められていたのが、その非軍事的利用であり、戦時動員されていた科学技術の平和利用であった。しかし、水素爆弾の実用化(小型化、核弾頭)やICBM(大陸間弾道ミサイル)など、戦略核兵器の開発、配備は続けられ⁽²⁶⁾、全面核戦争の危機へと向かう。その後、1960年代の平和共存路線(緊張緩和)の中で、1963年、PTBT(部分的核実験停止条約)が調印され、1968年には、NPT(核拡散防止条約)も調印(1970年発効、日本は、1970年署名、1976年批准)されたが、1989年、東西冷戦の終結後も、1996年に採択されたCTBT(包括的核実験停止条約)は未発効(米国などが批准せず)であり、原子力の平和利用も、チェルノブイリ原子力発電所の事故(1986年)や、東海村核燃料加工施設(JCO)の臨界事故(1999年)を経験することになる。

ゴジラ映画は、昭和ゴジラ・シリーズと復活版ゴジラ、平成ゴジラ・シリーズの間に8年間の空白期間(復活版を越えて13年間の期間)があり、原子核エネルギーのこれらの歩みを、逐一、反映して来た訳ではないし、そのことだけをテーマとした映画でも勿論ない。『ゴジラ対ヘドラ』(1971年)では、1970年代の最も身近な問題であった公害問題を主題としているが、「進歩と調和」をテーマとした大阪万博(EXPO'70)でも取り上げられた公害問題と原子力(「原子の灯」、敦賀発電所、美浜発電所から送電)の内、一方を反映したものだ。1960年代後半から70年代にかけて、日本は、米国から沸騰水型軽水炉(BWR)を導入して、軽水型原発の建設、運転を次々と開始する(1970年、敦賀発電所が最初、1981年までに23基)と共に、核燃料サイクルの確立を目指して、高速増殖炉(FBR)の研究開発(実験炉「常陽」)を進めていた時代であった⁽²⁷⁾。「非核三原則」という言葉も踊っていた時代でもある。1970年代の石油危機を迎え、

原発への依存が加速する中で、原子力の平和利用の問題点（プルトニウムの再利用）が浮上し、原発そのものの安全性も問われてゆくことになる。復活版『ゴジラ』（1984年）は、1980年代前半、東西冷戦構造の再燃と、核の脅威が反映されたものであり、米国のSDI（戦略防衛構想、1983年、レーガン米大統領）、「不沈空母」（1983年、中曽根首相）、大韓航空機撃墜事件（1983年、サハリン沖）などの緊張した世相を背景にしていたが、原発の危険性を描いてはいなかった。この作品は、初代ゴジラの原点に立ち帰り、核の恐怖（原子力の軍事利用）を描こうとはしているが、原子炉としてのゴジラそのものが不安定になる訳でもない。

1954年の核とは較べものにならない1990年代の核の威力を摂取して、ゴジラが以前よりも大きくなり（三枝未希の台詞、ゴジラ身長100m、『ゴジラvsキングギドラ』、1991年）、ゴジラの状態が不安定になってゆくのは（熱線の赤色化、『ゴジラvsスペースゴジラ』、1994年）、平成ゴジラ・シリーズになってからのことである。平成ゴジラに対しては、日本の科学技術の全てが投入されたような、そんな華やかさがある。原発そのものが暴走する訳でもないし、人々も無事である。しかし、体内の炉心温度が1,200℃（炉心熔解温度）を越え、ゴジラの背びれが熔けてゆくを見て（『ゴジラvsデストロイア』、1995年）、原子力開発や環境・エネルギー問題の破綻、そして、生命そのものの消滅、それら全てを一人で背負ってゴジラが死んでゆくような、そんな悲しさが描かれていたように感じられる。

メーサー殺獣光線車と原子熱線砲

ゴジラは、「水爆そのもの」と言われたものから「原子炉」へとその意味を少し変えてゆき、平成ゴジラ・シリーズを終えた。しかし、1966年に東海発電所がゴジラに襲われてから、日本が原子力発電を放棄し、「クリーン・エネルギー」（プラズマ発電）に移行した後も猶、ゴジラが出現するのは何故なのであろうか（『ゴジラ×メガギラス G消滅作戦』、2000年）。原子核エネルギーのみならず、人間の生み出すエネルギーそのものに対して、ゴジラが憎んでいるという

理解もあるが(『ゴジラ 2000 ミレニアム』, 1999年), ゴジラは、やはり、山根博士の言うように、一つの「生命」なのではなかったのだろうか。水爆の放射能を受けても猶、その落とし子として「生きている」初代ゴジラの「死」に対するレクイエムを原点とし、1954年以来、繰り返された「特殊生物」(巨大生物)との戦いを振り返り(『ゴジラ×メカゴジラ』, 2002年), 「生命は、定められた時の中にこそあるべし。」(『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京 SOS』, 2003年)と言われる視点が持っている主題には、初代ゴジラの遺骨の在り方を問い、原子力などではなく、実はもっと重い生命の尊厳そのものの問題がそこには秘められている。ゴジラ・ミレニアム・シリーズは、平成ゴジラ・シリーズの内容を継承したものではなく、『ゴジラ』(1954年)に立ち帰って製作されたものであった。

では、人間は、ゴジラとどう戦えば良かったのであろうか。ゴジラが核エネルギーそのものであるならば、核兵器を以て抑止するというのが、戦後の冷戦構造からは容易に想像できようが、対ゴジラ兵器に、核兵器はない。ロケット弾(後に誘導弾)と高圧電流が、『ゴジラ』(1954年)以来の対ゴジラ兵器の基本であり、F-86F セイバー(『ゴジラ』, 『ゴジラの逆襲』, 他)や、61式戦車(『モスラ対ゴジラ』, 1964年, 『怪獣大戦争』, 1965年, 他)など、実在する通常兵器の使用が主流である。ゴジラ映画第2作の『ゴジラの逆襲』(1955年)では、神子島(オホーツク海にある架空の島)で、氷山を爆撃して雪崩を誘発し、「氷の檻」でゴジラを封じ込める雪崩作戦が実行された。これは、『ゴジラ FINAL WARS』(2004年)のオープニングでも、「轟天号」で継承される作戦であり、ゴジラの「冷却」を目的とした方法であった。

架空の大型兵器は、ゴジラ以外の東宝特撮映画に多く登場しているが、ゴジラに登場したものとしては、「オキシジェン・デストロイヤー」(『ゴジラ』)の後、「A サイクル光線車」(電磁波に対する妨害音波, 『怪獣大戦争』), 「ムーンライト SY-3」の「冷線ミサイル」(『怪獣総進撃』, 1968年), 平成ゴジラ以降では、「スーパー X, スーパー X2, スーパー X3」(カドミウム弾, 冷凍ミサイル, 超低温レーザーなどを搭載, 復活版『ゴジラ』, 『ゴジラvsビオランテ』, 『ゴジラvsデストロイア』), 「フルメタル・ミサイル」(『ゴジラ 2000 ミレニアム』),

「ディメンション・タイド」（ブラック・ホールの生成、『ゴジラ×メガギラス G 消滅作戦』）、「D-03 削岩弾」（『ゴジラ・モスラ・キングギドラ 大怪獣総攻撃』）、「3式機龍」の「アブソリュート・ゼロ」（『海底軍艦』、1963年、轟天号の「絶対零度砲」が継承されている、『ゴジラ×メカゴジラ』、『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京 SOS』）など、地球を守る正義の味方であった昭和ゴジラには、使用された特別な「対G兵器」があった訳ではないが、低温兵器の使用を中心として、ゴジラの「冷却」と「貫通」を主眼としていたものであったことが分かる。

そして、昭和、平成を問わず使用されている対ゴジラ兵器の代表が、「メーサー殺獣光線車」である。メーサー（MASER）とは「Microwave Amplification by Stimulated Emission of Radiation」（誘導放射によるマイクロ波増幅器）のことであり、レーザー（LASER, Light Amplification by Stimulated Emission of Radiation）とは別のものであるが、全く架空の原理という訳ではなく、細胞の水分を蒸発・凝固させて破砕する対特殊生物兵器である⁽²⁸⁾。核兵器ではない。この兵器の初出は、『フランケンシュタインの怪獣 サンダ対ガイラ』（1966年）の「66式メーサー殺獣光線車」に溯るが、「92式メーサービーム戦車」（メーサータンク、『ゴジラvsキングギドラ』）などを経て、『ゴジラ×メカゴジラ』の冒頭でも描かれる「90式メーサー殺獣光線車」に至っている。

メーサーは、電磁波の誘導放出によってマイクロ波が増幅・発振するものとされており、『ゴジラ×メカゴジラ』では、台風の雨のため出力が安定しない様子や、空中での揺らぎ、水蒸気の発生など、細かい所まで精密に描かれている。ゴジラ映画の特撮映像に表れた最高のクオリティーであることは間違いない。そして、歴代のメーサー殺獣光線車の映像は、サンダ・ガイラ戦以来、総じてその古典的な映像に忠実であった。つまり、砲塔を上げ、目標の方向に回転させる時の作動、また、メーサーを発射する時のタイミングや、パラボラ部の発光と一時停止の表現など、絶妙なタイムラグが見られることである⁽²⁹⁾。また、メーサーが放射される方向は、右手にメーサー車、左手に怪獣という構図になっており、右から左へ光線が走る。映画の基本でも、画面の上手（右手側）に優勢なものを、下手（左手側）に劣勢なものを配置する。飽くまでも原則で

しかないのだが、『ゴジラ×メカゴジラ』は、『フランケンシュタインの怪獣 サンダ対ガイラ』の構図を踏襲しているし、『ゴジラvsキングギドラ』でも、メーサータンクが下手(左手側)に来た直後に、ゴジラの熱線で破壊されている。そして、メーサーの威力の表現方法は、メーサーが、怪獣に直接照射されるのではなく、目標との間にある障害物をも破砕するシーンが、その威力を物語っている。火花が散り、林木が折られてゆくシーンには、怪獣に直接命中するシーンに勝るとも劣らない迫力があつた。

メーサー殺獣光線車は、パラボラ状の砲塔部や、可動式砲台と牽引車の編成など、「A サイクル光線車」(『怪獣大戦争』)、「原子熱線砲」(『モスラ』)と、兵器としての原理は全く異なるが、同じ系譜に属するものである。しかし、このメーサー殺獣光線車と似て非なるものが、「原子熱線砲」であつた。『モスラ』の「原子熱線砲」は、ロリシカ共和国(米国)から貸与された兵器であり、東京タワーのモスラの繭を攻撃するために使用されたものである。これは、核兵器であることを、その名称が示しており、『モスラ』で唯一、一度だけ使われた。東京のど真ん中で使用されても、強烈な光を発して、サングラスで眼を覆うことこそすれ、被曝の危険がない。『モスラ』は、既に述べたように、インファント島と、この「原子熱線砲」によって、戦後、日本が原子力の軍事利用に最も近付いた作品である。1961年のモスラは、卵の時にインファント島で被爆し、そしてまた、再び、核兵器を使用されてしまったのである。インファント島の守護神に照射された熱線は、『ゴジラ』とは対照的に、高度経済成長期の「明るい」戦後日本に持ち込まれた原子力のもう一つの姿であつた。ゴジラに使用される対G兵器は、通常兵器の他は、架空の低温冷却兵器に特徴があり、「スーパーX3」は原発事故にも使えるものである。ゴジラという「原子炉」或いは「生命」の活動を停止させ、静かに眠らせてやる目的があつた。「メーサー」(加熱・凝固させて破砕)であれ、「アブソリュート・ゼロ」(絶対零度にして破砕)であれ、ゴジラは、「オキシジェン・デストロイヤー」以外の兵器では倒されたことがなく、1954年の水爆実験に遭遇して後、二度目の核兵器は使用されたことがなかつたのである。

G細胞から死者への鎮魂へ

ゴジラを「生命」として研究しようとする山根博士の系譜が、平成ゴジラ・シリーズ以降、顕著に現われてくる。その代表が、「G細胞」を研究する白神博士（『ゴジラvsビオランテ』）である。平成ゴジラは、当時、関心を向けられていたバイオテクノロジーや精神科学を背景にして、ゴジラの生態を解明する擬似科学として、あからさまに描かれて来た。ゴジラと交信する三枝未希のテレパシーまで登場するが、「原子炉」に見立てられたゴジラの「G細胞」への拘りは、初代『ゴジラ』に内包されていた「水爆」と「生命」の二項対立の延長線上にある。ゴジラは、水爆実験の放射能の中から生き残り、しかも、放射線を悉く除去してくれる存在であり、ゴジラ細胞は、人類に与えられた貴重な研究資料である。「抗核エネルギーバクテリア」（『ゴジラvsビオランテ』）や「オルガナイザー G1」（『ゴジラ 2000 ミレニアム』）は、放射能を浴びても死なない、驚異的な細胞の再生能力を解明し、それを手に入れることができるかも知れない研究だったのである。ゴジラは、「被爆」と「再生」の主題を持っていたということである。

しかし、ゴジラ・ミレニアム・シリーズに入り、「G細胞」は、ゴジラ以外の他の生命体が摂取しようとしても、制御できないことが分かった。ビオランテから予測はされていたことだが、怪獣オルガの悲惨な最期がそれを示している（『ゴジラ 2000 ミレニアム』）。そして、もし「生物」なら、武器で殺せるはずだが、ゴジラは、死なない。それは、「残留思念の集合体」（無数の魂、魂魄ということであろう）だからだ、ということになった（『ゴジラ・モスラ・キングギドラ 大怪獣総攻撃』）。白神博士の亡き一人娘・英理加の細胞がバラに組み込まれ、「G細胞」と融合したものがビオランテだが、ビオランテの粒子が天空に消えてゆくシーン（『ゴジラvsビオランテ』）にも、「死者の魂」と「G細胞」の親和性の高さが既に描かれていた。

では、ゴジラが、何故、依然として出現し、徘徊するのか。「生命は、定められた時の中にこそあるべし。」という生命の尊厳から、「3式機龍」（メカゴジラ）の製造に日本が利用した初代ゴジラの骨を海に帰すことになった（『ゴジラ×モ

スラ×メカゴジラ 東京 SOS』)。初代ゴジラは、水中酸素破壊剤によって、東京湾で跡形もなく消えたはずだが、館山（房総沖）からその骨を回収し、「3式機龍」の「DNA コンピューター」に再利用された。東京に上陸した2代目のゴジラは、初代ゴジラの遺骨の返還を求めるかの如く、この「3式機龍」に共鳴して呼び寄せられる。『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京 SOS』は、2代目ゴジラが「3式機龍」に抱えられて、相共に、日本海溝3,850mの海底に沈んでゆくシーンで終わるのだが、ここには、ゴジラの遺骨の在り方、つまり、生命は寿命を越えて徘徊するものではなく、「成仏」して、「鎮魂」と「帰郷」という、死者になった者とそれを送る者の安寧が希求されている。「水爆の放射能を受けながら、なおかつ生きている生命の秘密」(山根博士)などあるはずはなく、水爆（或いは、それ以上の水中酸素破壊剤）を使われたら、生命は死ぬ、「生命は、定められた時の中にこそあるべし。」(インファント島からのメッセージ)ということが、戦後50年のゴジラ映画史の帰結だったのである。

ゴジラが、一つの「生命」でしかなかったことは、実は、『ゴジラ』(1954年)で既に描かれていた。新橋から銀座へと進行してゆくゴジラの頭部を背景に、銀座松坂屋の屋上で売られていたものであろうと推測される、鳥籠の中の「小鳥」が登場する。巨大な水爆怪獣と小さな生き物のこの対比は、ゴジラの大きさのみならず、生きる者の上に忍び寄る「死の影」のようにも見えるが⁽³⁰⁾、そうではなくて、ゴジラも、この小鳥たちと同様に、この世に生かされている、生きることを許された、命なのだ（或いは、命だったのだ）ということを表しているのではないだろうか。異質なものの対比ではなく、秘められた共通性を並置したものであったのである。ゴジラは、この小鳥たちを襲わないばかりか、小鳥たちが囁き、それに応えるかのように咆哮するゴジラの姿が重なるシーンには、同じ生き物としての共鳴があったようにも見える。抑も、ゴジラは、大戸島で牛と豚に被害が出たと大戸島村長によって報告されてはいるが、他の動物を殺したことがない。復活版『ゴジラ』(1984年)では、井浜原発を襲った後、渡り鳥の鳴き声に引かれて振り返り、その後を追ってゆくし、『ゴジラvsキングゴジラ』(1991年)でも、北海道網走に上陸したゴジラと、牧場の乳牛たちが並んで歩くシーンが見られるのだが、そこには、生きてゆくための共生・共

存を感じさせるものがある。原水爆のように、生命を大量に殺戮するようなゴジラは、日本にはいない。

ミレニアム・シリーズは、原子力発電を永久放棄し、火力、水力、風力、ソーラーなど、エネルギー問題を問うたもの（『ゴジラ×メガギラス G消滅作戦』）や、X星人や宇宙怪獣ガイガン、キングギドラ（カイザーギドラ）から地球を守る1960年代、70年代の在りし日の最強のゴジラを、東の間の間、再現してくれたゴジラ映画最終作『ゴジラ FINAL WARS』があるが、2003年の『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京 SOS』によって、ゴジラが請け負った命への「鎮魂」という形で、やっと収束したのである。ゴジラ映画史の帰結であり、行き着く先であった。1954年の『ゴジラ』のラストで既に描かれていたことではあったが、被爆して逡巡した日本にとって、初代ゴジラから49年の歳月を要したということなのである。また、2001年、『ゴジラ・モスラ・キングギドラ 大怪獣総攻撃』では、白眼の（魄霊の）ゴジラが、焼津港に上陸して、「第五福龍丸、焼津入港」の記憶の衣手を返した。漁協のポスターの写真が、ゴジラ映画に初めて登場する「第五福龍丸」である。

映画『第五福龍丸』（1959年）は、久保山愛吉氏の遺骨を乗せて、東京駅から焼津駅へと向かう東海道線（牽引機 EF58 の客車）のシーンには、感極まる思いがする。有楽町・新橋駅間の1954年のゴジラが壊した鉄道高架線の光景に始まり（1959年なので、東京高速道路が一部開通している）、途中の小田原駅、静岡駅では、花束が捧げられ、そして、車内を流れる時間は、長くて重い。走行する列車に、これだけの国民の弔意が表され、鎮魂の在り方を描いた映画も稀有であろう。ゴジラ映画史50年の最大の本質も、これと同じ、生きて来た「生命」への鎮魂歌にある。

エピローグ — 生きている証し —

原子力についてどう思われますか、と、一昨年、新潟日報の文化部記者から取材を受けた時、最後に問われた。柏崎刈羽原発も抱えているからであろう。ゴジラを研究対象としつつも、私がこれまで意図的に回避していた話題であ

り、「夢のエネルギーであった」とだけ答えておいた。2011年3月11日の前年のことである。この約一年間、原発や放射能の情報に溢れる中、ゴジラ映画史研究の再検討を試みてみた。原子核物理学や原子力工学、放射線医学、政治外交史や社会史など、専門分野を問うてはられないのだが、本稿は、飽くまでも、映画『第五福竜丸』と『ゴジラ』の比較を主旨としたものである。原子力の問題は避けては通れなくなったことも確かだが、ただ、結局の所、鎮魂の表現の問題に行き着くであろうとも思われる。

小津安二郎の『宗方姉妹』(1950年)で、満鉄にいた父(笠智衆)が雑誌「THE ATOMIC BOMB」を読んでいる一瞬のシーンや、モスラの幼虫が、小河内ダム(多摩川第一発電所)を壊すシーン(『モスラ』)など、気になっているシーンもまだある。小津と原爆、モスラと発電という取り合わせは、何処かでゴジラ映画史とも脈絡を通じているはずである。原子力、原水爆、核兵器の問題は、これまで全くの埒外であった。確かに、ゴジラは、「核中毒」に罹り⁽³¹⁾、日本人にとっての鎮痛剤でもあり、熱線放射によって全てを浄化しようとしていたのかも知れない。戦後の「病理学」とも言えよう。背びれの発光は、一方では、それを表している。原子の光であったのだ。

しかし、ゴジラは、初代ゴジラ以来、或いは、ラゴス島のゴジラザウルス(『ゴジラvsキングギドラ』)以来、銀幕上のことではあれ、やはり、生きていた一つの「生命」であったということを忘れる訳にはいかないし、どの様に歴史に翻弄され、どの様に人々に葬られたのか、ということを考えざるを得ないのである。それが、「鎮魂」と「帰郷」という、海からやって来て、海へと帰ってゆく、ゴジラ映画史の主題であると思われる。螢の光(螢火)は、人の魂でもある(『伊勢物語』、第45段)。発光する背びれは、命の光であり、生きている証しでもあったのだ。

注

- (1) 『ゴジラ／ゴジラの逆襲／大怪獣バラン』, 東宝 SF 特撮映画シリーズ VOL. 3, 東宝, 1985年, 「G 作品」検討用台本 (作・香山滋), 94頁, 「第五福龍丸 焼津入港」とある。竹内博・山本眞吾編『円谷英二の映像世界』(完全・増補版), 実業之日本社, 2001年, 竹内博「『ゴジラ』の誕生」, 69-71頁, 参照。
- (2) 「第五福竜丸」については, 大石又七『ビキニ事件の真実 — いのちの岐路で』, みすず書房, 2003年, 大石又七『これだけは伝えておきたい ビキニ事件の表と裏 — 第五福竜丸・乗組員が語る』, かもがわ出版, 2007年, 第五福竜丸平和協会編『写真でたどる第五福竜丸 — ビキニ水爆実験被災50周年記念・図録』, 第五福竜丸平和協会・平和のアトリエ, 2004年, などを参照。
- (3) 静岡新聞社編『第五福竜丸 心の航跡』, 静岡新聞社, 2004年, 110-111頁, などを参照。
- (4) 『ビキニ事件の真実 — いのちの岐路で』, 前掲書, 55頁, 参照。
- (5) 「主な海難を振り返って」, 『海と安全』, No. 538, 第42巻, 秋号, 2008年8月, 日本海難防止協会, 参照。
- (6) 焼津漁業協同組合 (<http://www.yaizu-gyokyo.or.jp/>), 焼津市・水産業 (<http://www.city.yaizu.lg.jp/sangyou/suisan/>), などを参照。
- (7) 『第五福竜丸 心の航跡』, 前掲書, 104-109頁, 参照。
- (8) 朝日新聞, 夕刊, 1959年8月19日, 1頁, 「降水量, 大変な増加, 東京でストロンチウム90」, 朝日新聞オンライン記事データベース for Libraries 「閉蔵Ⅱビジュアル」, 新潟大学附属図書館 (<http://www.lib.niigata-u.ac.jp/joho/kikuzo/kikuzo2.html>), などを参照。戦後の朝日新聞の記事参照は, 以下, 同データベースに拠る。尚, この記事に拠ると, 1954年のストロンチウム90の年間降水量は, 1平方キロ当たり1.0ミリキュリーであり, その後, 0.7 (1955年), 3.8 (1956年), 3.5 (1957年), 5.3 (1958年) と推移し, 1959年前半までの蓄積量は21.4である。
- (9) ウィリアム・パウンドストーン『囚人のジレンマ — フォン・ノイマンとゲームの理論』, 青土社, 1995年, などを参照。
- (10) 朝日新聞, 朝刊, 1955年8月10日, 1頁, 「原子雲を越えて5, ウラン超原爆の出現」, 山本政儀「ビキニ原爆被災事件から半世紀: 今思うこと」, IPSHU 研究報告シリーズ, 41, 2009年, などを参照。

- (11) 朝日新聞, 朝刊, 1954年3月17日, 3頁, 「ビキニの灰, 希土類の酸化物か」, などを参照。
- (12) 江沢洋「仁科芳雄の知られざる研究」, 日本物理学会講演概要集, 65 (1-2), 2010年, 池田長生「ウラン237と対称核分裂の発見」, 理研ニュース, 2011年3月号 (http://www.riken.go.jp/r-world/info/release/news/2011/mar/topi_01.html), 参照。
- (13) 田島英三「理研のサイクロトン物語」, 日本物理学会誌, 45 (10), 1990年, 朝日新聞, 朝刊, 1954年3月21日, 7頁, 「世界の眼集める木村研究室, “死の灰”の分析快調」, 参照。
- (14) 「11. 新型爆弾投下関係」, 昭和二十年八月九日後十一時五五分 在瑞西 加瀬公使 東郷外務大臣 第三九九號 大至急, アジア歴史資料センター (JACAR), Ref. B02032435900, 外務省外交史料館 (<http://www.jacar.go.jp/>), 参照。
- (15) 辻哲夫「仁科芳雄の生涯・1890~1951」, 日本物理学会誌, 45 (10), 1990年, 矢崎裕二「科学史入門: 仁科芳雄と戦前日本の物理学」, 科学史研究, 41, 2002年, 参照。
- (16) 山崎正勝「理研の「ウラニウム爆弾」構想 第二次世界大戦期の日本の核兵器研究」, 科学史研究, 40, 2001年, 同「第二次世界大戦時の日本の原爆開発」, 日本物理学会誌, 56 (8), 2001年, 朝日新聞, 朝刊, 1945年10月18日, 3頁, 「“実験室の幻想”とはねつく, 日本の原子爆弾」, 参照。
- (17) 「二つの「計画」」, 「「二号研究」悲話」, 理研八十八年史より, No.8 (<http://www.riken.go.jp/r-world/info/release/riken88/text/no08.html>), 参照。
- (18) 人形峠環境技術センター, 日本原子力研究開発機構 (<http://www.jaea.go.jp/04/zningyo/>), などを参照。
- (19) 河村豊・他「シンポジウム: 日本戦時科学史の現状と課題 — 2003年度年会報告 —」, 科学史研究, 43, 2004年, 参照。
- (20) 『ビキニ事件の真実 — いのちの岐路で』, 前掲書, 37頁, 他, 朝日新聞, 夕刊, 1954年3月16日, 3頁, 「マグロ漁船ビキニで原爆浴びる, 強い放射能を検出, 築地で福竜丸の魚押う」, 同, 朝刊, 1954年3月17日, 7頁, 「築地で五百貫埋める, 各地に流れる福竜丸の魚」, 同, 夕刊, 1954年3月17日, 3頁, 「原爆魚を埋め終る, マグロ半値に下る」, 地域資料, 「放射能マグロ事件 — 東京都中央卸売市場築地市場 —」, 昭和29年7月, 書誌番号001703333, 中央区立図書館 (<http://www.library.city.chuo.tokyo.jp/>), などを参照。
- (21) 駒村美佐子・他「わが国の米, 小麦および土壌における ^{90}Sr と ^{137}Cs 濃度の長期

- モニタリングと変動解析」, 農業環境技術研究所報告, 24, 2006年, などを参照。
- (22) 荒川恵子「被爆国の逆説 — 1957年から1963年日本の反核運動の盛衰 —」, 一橋法学, 7 (2), 2008年, 宇吹暁「日本における原水爆禁止運動の出発 — 1954年の署名運動を中心に —」, 広島平和科学, 5, 1982年, 藤原修「原水爆禁止運動の分裂をめぐって — 安部一成の平和運動論 —」, 現代法学, 19, 2010年, 参照。
- (23) 好井裕明『ゴジラ・モスラ・原水爆 — 特撮映画の社会学』, せりか書房, 2007年, などを参照。
- (24) 山崎正勝「日本における「平和のための原子」政策の展開」, 科学史研究, 48, 2009年, 市川浩「旧ソ連邦における船用原子力機関開発の最初期とその問題点」, 社会文化研究, 28, 2002年, 参照。
- (25) 北村洋基「日本の原子力開発の現段階」, 商学論集, 51 (2), 1982年, などを参照。
- (26) 小川伸一「ミサイル防衛の戦略的意義と国際安全保障に与える影響」, 防衛研究所紀要, 第6巻第1号, 2003年, などを参照。
- (27) 「日本の原子力開発の現段階」, 前掲論文, などを参照。
- (28) 野村宏平編『ゴジラ大辞典』, 笠倉出版社, 2004年, などを参照。
- (29) 『円谷英二の映像世界』, 前掲書, 264-265頁, 参照。
- (30) 川北紘一監修『僕たちの愛した怪獣・ゴジラ』, 学習研究社, 1996年, 小林晋一郎「怪獣王の誕生」, 56頁, 参照。
- (31) 川村湊『原発と原爆 — 「核」の戦後精神史』, 河出書房新社 (河出ブックス), 2011年, 参照。